

# 唐音十八考

文學博士 中山久四郎

## 目次

緒言

一 征言の中の唐音語……………	一頁
二 豊太閤扇面の唐音語……………	二
三 會昌利の狂歌の中の唐音語……………	三
四 カルサンの唐音……………	四
五 欠と甲と鏡の唐音……………	六
六 キヤタツの唐音……………	七
七 センロツマン附ソボロの唐音……………	八
八 ベイロム(ハイロム)の唐音……………	九
九 ミイラとメランスの唐音……………	一二
十 近松門左衛門と唐音……………	一三
十一 竹田出雲と唐音……………	二〇
十二 頼山陽と唐音……………	二二

目次

目次

二

十三	昔川洪國と唐音	二三
十四	『新シキ音』の傳來	二四
十五	唐音略譜	二七
十六	唐音の唐人語	三九
十七	唐音の字の並び	四〇
十八	チャンコロ即中國人考	四三
	附論一頁特に唐音傳播の功用につきて	四四

## 緒言

此一篇は、近世支那文化の我が日本に及ぼせる勢力と影響を言語文字の方面特に唐音の方面より研究したる結果の一部を發表せるものなり。一種の外國語たる唐音が早くより我が國に傳はり、我が國語の中に混和融合して、すでに全く我國語の一部となりしもの少からず。或は全國日用の普通國語となり、或は一地方の方言となり、或は宗教界の專門語となり、或は文學其他の特別語となり、或は音樂に用ひられ、或は遊戯に用ひられて、その用途一ならずといへども、之を合計すれば、その數頗る多し。

是等の日本化的唐音語と、その原語「支那語」との對譯比定は、必ずしも其すべてが難事といふにはあらずして、大體解説對比されて、其原語原音の判明せるもの多しといへども、未だ其對比の判明せざるもの少からず。本篇は後者即ち比較的難解の唐音語につきて研究したる結果の一部と、唐音關係の特別事項研究の一部とを發表して、讀者諸君の批正を乞はんとする者なり。

### 一 狂言の中の唐音語

足利時代の狂言の中、唐人千寶(狂言拾遺 第十一卷)、唐人相撲(狂言拾遺 二卷)及び唐樂(狂言拾遺 第十一卷)のシテ、ツキなきの人が唐音を以て問答するものあり。當時日明交通の爲め唐音の流行したる一例證として注意すべきものなるべし。特に唐人千寶の狂言には、左記の如く唐音九語を載せたり。當時の唐音は、則音の支那語をうつしたるものならんが、今試みに今の所謂官話の支那音によりて狂言の假名文字の唐音語と對譯還元せしめたる漢字を記入すれば、左の如し。

ハウクウ	かなしい	好苦
ブスウ	いやく	不是
ヒイハン	嬉しい	喜歡
クワイシイ	早ふ	快些
サアスウ	しばらく	少時
ナアライ	持てこい	傘來
クワンキン	首尾	光景
タフケ	いや	他不背
チントリヨ	心得た	知道了

此對譯につきて參考すべきものは、「唐音和解」(作者未詳、正徳六年道遠軒題首寛延三年刊)の乾の巻に、左の如く記さるゝ所の六唐音語なり。(附記「唐音和解の凡例に「右は唐音、左は和音」とあり)

音語門

光景	首尾	傘來	持來
快些	早々	不是	嫌々
喜歡	嬉	好苦	戀々

二 豊太閤扇面の唐音語

次に豊臣時代の唐音の實例として注意すべきものは、豊太閤所持と傳へらるゝ扇面に記されたる外國語

なり。この唐昔外國語につきては故文學士藤田明君は弘安征戰休績中篇に於て之を考證して明時代の支那語なるべしとなし、支那語學者に質問して、假名文字の扉面の外國語に支那音原語の漢字を對比し、十七語の中、十三語は之を比定對譯せられしが、四語は對比すべき支那語なしとせられたりしが如き狀あり。今此四語もつくわい、たじん、なうれう、かんふかんに就て考ふるに、左記の如く對比すべきものかと思はるゝなり。

(没話可驗)

御れい申なり

(没話可驗(御禮の申)  
上げやうこれなし)

(多日不見)

此程御目にかゝらず

(多日不見)

(櫛了又は圓了)

服立

(櫛了圓了)

(幹不幹)

左様敷左様

(幹不幹)

この對譯につきて參考すべきものは岡島冠山の「唐語纂要」(享保元年序跋)卷一の二字語の中に、

發惱ハハラダ

惱怒ハハラダ

とあり又島津重豪の「南山俗語考」(明和四年自跋)南山は重豪の別號なり(卷一の性情の部に

好惱怒ハハラダ

とあるが如きものなり。

### 三 曾呂利の狂歌の中の唐音語

次に又豊太閤に關することなるが、太閤ある時御茶菓子に黒胡麻をかけたる搦飯を糞塵せられしに、曾呂利新左衛門は、

搦飯黒胡麻かけて出でたれば

皆人毎にあ、うまさいふ

さいふ一首の狂歌を作りしさいふ。この歌釋了意の曾呂利歌賦に見ゆ。「あ、うまさいふ」の末の一句は、たゞうまいあ、美味なりさいふ義なるが如し。然れども鳥津重濠の成形圖説卷二十に

伊曾仁 即胡麻也蓋古名ミ云未考得ず

字吳麻……又胡麻唐音ウマーしからば字は胡の唐音にして此間に有來れる胡麻の外に舶來の種をさして字吳麻さいひしを、後は音便に従て吳麻さのみ呼びしは見えたり。

さあるによつて考ふれば、「あ、うまさいふ」のうまは單にあ、うまいあ、美味なりさいふの義のみにあらずして胡麻がウマ又はウマーの唐音なるに因み發音の洒落をも加味し胡麻をかけたる握飯なれば、「あ、うま胡麻さいふ」とよみしものなるべし。曾呂利新左衛門が唐音通なりしや否やは未だ之を知ることを得されども兎に角この歌は胡麻の唐音を應用したるものらしく思はるゝなり。胡麻の唐音のウマミ味のうまいのうまを結び合せて、「あ、うまさいふ」と洒落てよみしものなるべし。斯の如く見てこそ益々この歌の妙味加はるが如く感ぜらるゝなり。單にあ、うまいさいふのみにては曾呂利の頓智を要せざるこそなり。

胡麻の唐音の胡につきては胡散胡圖胡畫なきの唐音語を参考すべきなり。

#### 四 カルサンの唐音

カルサンは一種の汗褸袴なり。通常輕移の字をあつるも是は汗褸の唐音的日本語なるべし。「俚語集覽

愚按に、輕移ミかけるは、全くの俗川也。汗移なるべし。

汗字は舌内音にてカンをカルミ呼ぶべき字なり。云々。

こいへるは、正當の解釋なり。また田宮仲宜の『偶奇假名引節川』に、明に汗移ミ振假名をつけたるは、簡明といふべし。國語の諸辭書に、がるさん輕移ミあるは、考證未だ詳ならざる者といふべし。

汗カン又はカヌのカルミなることにつきて聯想するものは、角鹿の地名がつひに教實となり、散樂サンガク、サヌガクが猿樂となれるなきの日本の諸實例を始めとして、左記の如き支那史上の諸例證なり。

安 息 アルサク Anak.

安出虎水

安尤虎水

安出新水

按春水

按養(按台)

阿勒楚哈河

阿爾泰

以上安または按の字のアン又はアヌがすべてアルミなるものなり。

迦盤陀

悉利斤

大宛

崑崙

Garbuda.

Samarqand.

Tawar, Topara.

Quilon.

以上漢萬宛屯の四字共にン又はヌの音を以て終るものなれども、ルの音の外國語に充用されたる

ものなり。

### 五 欠と甲と夨の唐音

カンといふ國語に唐音起源のもの三ツあり。欠と甲と夨となり。甲と夨の川例はめづらしからざれども欠の川例は普通周知の事にあらざるべしと思ふ。

欠(カン)は量口の缺損消耗をいふ。欠の字の支那音 *kan* より轉じたるものなり。或は又欠の字の日本漢音のケンの轉じたるものかとも思はる。欠の字、往々缺の字に代用せられて、ケツと音讀するものあるも元來ケンの音なり。坎の字の音がカンなることもこの場合参考すべきものなり。尙欠の字の上記の如き意味の川例には、欠缺欠債欠款欠項欠契欠單なきの諸語あり。又元の朱傑の「算學啓蒙の和刻本」足野助衛門財實正註巻上の二十六頁の算術問題

今有人欠錢一萬一千二百五十貫。欲還錢銀適等云々。

の「欠錢」の「欠」にケンと特に振假名をつけたり。さて岡島冠山の「唐語彙要」巻一に

欠情 *ブチタイクシマシタ*

とあり。中村平吾三近子著の「俗字指南專」(享保十六年自序)に「欠立」あり、谷口松軒著の「魁本大字類苑」(明治二十二年刊)のへの部に

耗米 *カンマイ*

とあり、カンの部に

省耗 *ヘリマイ*



こあり。是等のカンマイのCANは欠なるべし。又倭訓聚に、

算にかんのたつこいふは欠字也。短欠折欠なき見ゆ。

こあり。又注意すべきは、「木曾道中膝栗毛の中仙道加納驛の條に、

■川留はいゝが段々懐の内に欠がたつには困り果る。

こあるが如きものなき欠の唐音語CANは加る廣く行はれたりしなり。

又キャンスイ(欠錢)「俚語集覽」に、長崎にて金持たぬ人をいふこあり。これは欠錢の支那音 Kan chuan の轉訛したるものと看做すべきものなれば益々「CANが立つ」なきいふ場合のCANも、欠の字の支那音より起るものなりこいふ前説の穩當なることを認むべきなり。

又カンカンこいふ語あり。秤量を秤り調ぶるの義なり。その字は蓋し看欠にして、量目に欠即ち缺損減耗あるや否やを見るの義なるべし。看々の二字も考へ得ることなれども、量目を秤り調ぶるに餘のある欠の字を用ひて、看欠とする方穩當なるべし。

## 六 キヤタツの唐音

キヤタツこいふ語の原語として、通常(一)脚榻または(二)脚階の字をあて、或は(三)脚立とかくものあり。(三)の誤れるは益なかるべし。(一)と(二)の近世支那音は、ともに *chiat-tu (chi)* にして、特に脚階は近世支那語にもキヤタツの發に用ひらるれば、キヤタツの原語としても不可なかるべし。脚榻の二字も、音の上にてはキヤタツの原語として不可なからんも、近世支那語に於ては多く用ひられず。故にむしろ脚階をキヤタツの原語とするを可とせんか。

但し脚韻は又脚踏子ミもいふ。後者の三字の近世支那音は *tsing-pa-s* なれば、キヤタツの原語として最も可なるべし。或は又脚踏子ミもいふ。音韻ミもにキヤタツの原語として可なるべし。

### 七 センロツボン附ソボロの唐音

センロツボン 大根を細く長くせんニに切りたるものをセンロツボンミいふ。此語に千六本の三字をあつるが如きは全く俗説なること、左記の諸書によりても明なり。

せろつぼん 庭訓往來にいふ織羅菊を譯り呼るなり。

大根をほそくせんニに切たる也。〔倭詞采前編十三〕

生羅菊 ○尺素往來生羅菊今本の點にセンロツミあるはいふかし。それは織羅菊にて今俗にせんろふミといふものなり。よこなまりては千六本ミいふも、こさわりはかなへり〔類聚名物考飲食部四〕

**〔六十一〕** セロツキの味噌焼汁ミ云もの京師の茶席に用ふ。是をソロボ汁ミなき、いよくミ誤れり。大根を織ミに切て味噌を焼て焼ミせしものなり。故に織羅菊汁ミいふを誤れり。〔唱呼突草三〕

一大根をこまかに切しを織羅菊ミいふ事庭訓に見へたり。田舎の俗にこれをせんろほミ云又訛てせんろつぼんミいふ。〔續不問談〕

織羅菊ミと誤ミ 千六本ミ 〔俳字節用集下〕

線羅煎ミ茶湖香の十二月三日御歎立所記者所蔵の大菜の中に線羅煎ミあり。蓋し織羅菊の誤なるべし。

センロツボンの織羅菊より起りしものなること無論なるが、原音そのまゝのもの、及び原音より少しづつ、訛りたるものに左記の六種あり。

- (一) センラフ (織羅(生)羅(類)菜名物考飲食部) センラフ汁(橘庵隨筆三) (嗚呼矣草三)
  - (二) センロフ 織羅(下)學(下)之(二) (易林本節且集<sup>世</sup>飲食)
  - (三) センロツボン 轉訛して千六本(一語一言八)
  - (四) セロツホ 織羅(橘庵隨筆二) (嗚呼矣草三)
  - (五) セロツボン 織羅(庭阿往來)
  - (六) センロギ 織羅(被不同談)
- 次にセンロツボの音が轉訛して別様の形をとりたるものに左記の二ツあり。野菜を織細に切りたるものより轉して肉類のものとなりたるものなれども野菜のものにも用ふ。
- (七) ソロボ (嗚呼矣草三)
  - (八) ソボロ ソボロイモ(芋) ダイコン(大根) ソボロ、

## ハ ベーロン(バイロン)の唐音

パイロン 長崎年中行事の一たる鼓渡船の名稱なり。其原名漢字につきては文字一定せず。

劉龍(長崎名勝圖繪)

利龍(長崎町見録)

排龍(俳諧歲時記) (大坂盆博物筈)

切龍(瓊浦述)

爬龍(披閱外國竹枝詞)

扒龍 (Ti. A Giler. A Glossary of References)

の外、白龍、伯龍、把龍、刺龍、龍なまこあり。而して長崎名勝圖繪卷三上の「市中之都上の説明によれば

刺龍イロコは刺龍イロコ船なり。刺イロコ或は刺イロコに作る。亦通。刺は權にて攝く事なり。刺唐イロコ昔イロコツイロコ龍イロコは龍イロコ船イロコはジエイロコなり。舊イロコツイロコフイロコ龍イロコ或はツイロコフイロコ龍イロコジイロコエイロコといふべきを時俗華音を誤りて、昔よりパイロンイロコと云ひ習はせりイロコ。

さあり。刺イロコの字の音は華にして、〔葉韻〕舟進竿謂之刺。〔正字通〕方音。誤爲語。俗呼小船爲刺子。さあり。又〔辭源〕刺イロコ音華以竿進舟謂之刺。俗用以槳者爲刺。呼小船爲刺子。さあり。尙又 Giler. A Chinese-English Dictionary に於て

刺 Hua. C. Wa. F. Iwa

刺艇 name of a boat used at Musso.

刺子 A Sampan.

さあり。更に又和漢三才圖會卷第三船艇類にも、

刺船イロコ三才圖會云。刺艇進也。其船制短小。輕便。易於撥進。故名之。

さありて、刺船又は刺艇、辭にいへば刺龍船の刺龍がパイロンの原語たるが如し。されば倭詞架後編十五に、ばいろん刺龍イロコさかけり。唐音也さあるは、首音すべきものなり。

尙支那通の人に聞く所によれば、白龍イロコ船イロコといふ競渡船廣東にありといへば、白龍がパイロンの原語たるが如くにも思はるゝなり。

次に、長崎聞見録卷一に

崎陽の風俗五月五日六日船を競はす。名てばいろんご云。ばいろんは俗語なり。龍は龍船にて龍の頭カビの如く作りたる船を云なり。扱は鎌の事にて鎌を以て草なんきをかる如く、棹をもつて水をかくを云なり。

こいふ説明は聊か不明瞭にして、「龍」の扱の字は康熙字典にもなし。

之を要するに、バイロンの語源につきては、確定の説を得難し。別掲白龍の二語は、上記諸語の中にありては、尤もバイロンの語源をなすに適當なるものなるべし。

次に被龍と龍龍との二語は、從來のバイロン語源論者の言及せざりしもの、如し。此二語は、舟の尤制の外、國竹枝詞冊日本雜詠八國沙起雲（天明五年刊）に見ゆるものにして、其時は左の如し。

當日龍開競渡風。相傳亦學喚披龍。方音龍龍 爲披龍 雲植擊鼓聲高下。 聯曉江干驟遠空。

之によれば、も龍龍といひしを長崎の方言にて披龍といひしもの、如し。蓋し長崎にてバイロンを訛りてベイロンといひしことをさすものか。兎に角、バイロンの音がやゝ轉訛してバイロン、ベイロン、ニアロンとなり、長崎の市外郡部地方にては、ビヤアロンと訛稱するものありといふ。且つ又長崎にては海に於けるベイロン競漕を陸上にうつし行ふが如き陸、ベイロン（今流行のマラソン競走リレーレースなどに類するもの）といふものあり。既に一百餘年以前より行はるこいふ。

陸バイロンの名稱についても、バイロンに別龍の二字をあてたる長崎名勝園繪巻之五上の市中之部上の記事には、陸龍船（陸龍船）さかき又競渡船の三字にもバイロンと振假名をつけて別龍の字に類若せざるなり。龍の字のロン（龍）の唐音は龍動（ロンドン）の例によつても之を知ることを得べし。

### 九 ミイラとメリンスの唐音

ミイラ 此語に對比該當すべき原名漢語につきては從來木乃伊 (Hol. mummie; L. mumia; Engl. mummy) の音の轉訛せるものなるべしこの説を以て満足せしが如し。されども木乃伊の支那音ミイラとの對比はいさゝか該當ならざるが如し。而してこゝに

○密人 ミイラノコトナリ [熟語便覽 梅田老史編 元禄十二年刊]

○木乃伊 蜜人 [和漢合類大節川集 第六卷]

○密人流行の事 [八十翁物語前編下]

○みいら蜜人 [假名用例]

○木乃伊 蜜人 [俳字節川集下]

こありまた采覽異言卷三櫻陰腐談卷二及び俚語集覽の三書ともに、明の陶宗儀の輟耕錄を引きて、蜜人の字を以てミイラにあてたるによりて考ふれば蜜人 (Mia-men) の支那音がミイレンとなり、更に轉訛してミイラとなりし者こそすべし。なほ又閑窓瑛談教訓存貞高著天保辛丑年(十二年)阿部權齋喜任序、天保十二年刊の第五俚俗の異説の中にも輟耕錄を引きて、「亦一名蜜人(ミイラ)といふことあり。」

因みに記す。輟耕錄の記事は、その卷三の木乃伊の條にありて、左記の如し。

國人驗以石棺。仍瀧川蜜漫。鶴志歲月于棺蓋。瘞之。俟百年後。啓封。則俗曰蜜人。番言木乃伊。蜜州也。

メリンス 此語は西班牙語の *merino* より起りたる織物の名稱たること定説なるべし。而して初めはメリンスといひしを、つひにメリンスとよぶに至りしは、或は綾子(リンス)または綾子(リンス)といふ唐音の織物の稱呼がメリノスと混合して、メリンスといふやうになりしにはあらざるか。兩者ともに織物にしてリンス(綾子または綾子)の唐音既に早く傳播せるによりて、後に來れる西洋織物のメリノスをもリンスの音に引きつけてメリンスとよぶこととなりしものなるべし。此説は未確定のものなれども一假定説として附記するものなり。

## 十 近松門左衛門と唐音

岡島冠山、雨森芳洲及び物徂徠等の唐音家の相ついで出でたる寶永、正徳年代には諸方面に唐音通又は唐音を利用或は濫用する者輩出せり。近松門左衛門も其一人にして、その作中には唐音語を用ひしこと少からざるなり。

近松子の大職冠は、正徳三年の作なるが、其中には、

上言中官、下唐人ちんぶんかんするちんたの酒盛(大職冠第一)

纏笠領け聲張り上げ、唐人の行列唐人の行列、通辭詞の次第。(同第二)

なき、當時珍奇の唐蘭の氣分を加味したる文句少からざるが、

其比日本の學者高向の玄理を挨拶にて、御口上承らんさいひければ、はな若けんくるけんくるめあめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいするたら、こんたかりんさんな、ありしてけんさんはいろ、きんにやうにやんミゴ申しける。さすがの玄理一向合せかねきも……猶使はんミ團扇を以て玄理を招き、

てれめんていなばじりこんさんさらにいよう、萬能奇と音譯の名をいへば、……兩人重ねて不稟の我々、唐音通じ難く、日本詞御存じならば、和語の御口上承らんご望みければナ、尤々、……こんへいあるへい花ほうるがすてらかるめらやうかんかんさいひければ、……〔同第三〕

さいへる一段の如きは、穂積以實の難波土産（一名浮瑠璃文）なにはみやけ、又單に浮瑠璃評註（も名く）の國姓爺合戰評註の中に

又大職官の唐音は、唐菓子や音譯の名にてまぎらせり。

と評せしが如く、只一種の戲巧を弄したるものにして、右の浮瑠璃文句中の高向立理にあらずとも通じ難き奇妙の唐音まがひのものなるが、其中明に舶來の兩唐菓子の名たるものは、

こんへい（金米糖） Port, Confectus

あるへい（有平、有平糖） 〃, Aldeon

花ほうる ほうる 〃, Kolo

かすてら かすていら 〃, Castella

かるめら かるめいら（泡糖） 〃, Caramele

やうかん（羊肝、羊羹） 羊羹（漢のかんは唐音なり）

にして藥の名として明なるは、「萬能奇及び

ばじりこん ばじり Lat. Basilicum.

なり。又右の文句中の「君けんくるけんくるめいた」「君けんくるけん」は、久留米福岡地方の「来るけん」といふ方言を用ひ、「くるめいた」は、即ち久留米餡の義なり。



此一條は大正七年八月の長崎新聞掲載の長崎市古賀十二郎君の國姓爺研究の説を參考したり。

次に近松子の正徳五年の傑作たる國姓爺合戦の唐音につきてのべん。

第二はまづたひの「もろこしぶね」の段に唐の上臈即ち大明皇帝の御妹梅檀皇女が濱邊におり日本人をまねきて、

日本人く、なむからちよんのみさらやあく。……こいへる所謂唐音を解せざる小むつは腹をかへておかしがるや劇の主人公和藤内は、「つねく父が詞の唐韻を知りて之に應答せりあり。又千里が付の段の末に和藤内の新附の部下の名を列擧して、

ちやぐちう左衛門東薙塞右衛門呂宋藤兵衛東京兵衛……もうる左衛門じやが太郎兵衛さんごめ八郎、

……

こいひ尙又第三の獅子が城の段に、守城の唐人等が、

いやく思ひよらぬこまならぬく、きこらいく、びんくはんたさつぷおん、

こいひしとあるが如き、いづれも皆當時世人が漸く唐音の事を知りて之を問題させるによりて、唐音習ひの奇語珍名を弄して以て世人の喝采を博し舞臺の科白に一新趣向を添加せんとしたる近松子の用意苦心も亦感すべきことにして、亦正徳時代の唐音流行の一例證となすべきなり。なほ、此の國姓爺劇の唐音につきては、上記の總稿以貫の難波土産の評注の説頗る參考すべきものなれども、今は之を省略して載録せず。同書につきて一讀せられんことを希望す。

次に國姓爺後日合戦は享保二年の作なるが、其第三に大宛即ち臺灣の事を記せる一條の中に、

日本ミても奥山家邊土は訓みだる、に都を知らぬ島夷何か泣やら口説やら、夥長く財附ア、さうよ

くなくんはんにはやうんすんすんも平臥て、聲も借ます漢居たり。

とありて、「夥長」にはホイチウミ、「財附」にはツアイホウミ振假名をつけたり。或は單に假名のみにて「ほいてうくくつはいほう」を記して、漢字を記さざるものあり。いづれにもせよ夥長、財附の二語は西川如見の華夷通商考卷二の末に、

唐船役者 漳州ノ詞ヲ記ス

夥長 ホイチウミ 海上ノ乗方ヲ主ドル也。云々。

財附 ツアイホウミ 荷物商賈諸事ノ日計算用ヲ主ドル役ナリ

とあるものにして、近松子作中の「ほいてう」「つあいほう」の二語にも純然たる唐音の語なり。尙ほ「ほいてう」につきては、

○夥長 ホイチウミ 考天文地理役也 (譯詞遺編(寫本)唐船役者漳州ノ詞の條)

○夥長 ホイチウミ (象音錄)

○夥長 ホイチウミ チヤン (磯野文齋信春)者長崎土産

なきの諸書亦参考に供すべきなり。

又右の近松子作中の「くんはん」は、無論阿蘭陀の東印度会社のことにして、葡萄牙語の *Companhia* 支那人の所謂公班衙または公班牙に對比すべきものにして、近松子は唐音語と、もに西洋語をも利用したるものなり。但しその西洋語も、公班牙または公班牙といふ漢字音譯即ち唐音譯語によりて邦人に知られたることを思へば、これ亦唐音關係のものと考えられざるにもあらざるなり。

次に最初の國姓爺合戦より七年後の享保七年作の唐船嘶今國姓爺にも、近松子は唐音語を利用したり。

即ち最初の起筆より記して曰く

爲宛十三省さうつゑうりやうへん南北京山すゑんの西山東路てほうなんすい關東のてい關西行ちやうのふうけんのすへん唐の小哥の圖づくし……〔上巻〕

。是れ即ち唐音和解正徳六年序寛延三年刊にも記載さるゝ所の明清樂簡譜の一によりたるものらしきこゝは唐音和解より鈔録する所の左記のものを見て之を知るこゝを得べし。

十三省六節

○爲宛ノオオ家十三ノオオ省ムムム都走了遍ムムム○南北ワアア京山陝ノウ西イイイ山東路的河ワアア南内エアイヨオオ關東ノウオオ地○關西イイイ行朝關縣

〔附言〕「關縣」の縣の字は建の誤記なるべし。

近松子の所謂唐の小哥の文句中漢字に唐音的の振假名を施したるものは今こゝに之を説明するこゝを要せず。平假名にて書きたるものに漢字を充當對比すれば左の如し。

○さうつゑうりやうへん 關西 關東

○すゑんの西 陝西

○山東路てほうなんすい 山東路 河南

○關西行ちやうのふうけんのすへん 關西行朝 關西

又唐船新今國姓爺の上巻の中には唐人の木遣唄といふものを記して三百七十許の唐音まがひの平假名文章あり。即ち

けゝらほげゝらほにほうりすゝりすくひなんみつせいげゝらほうく……けゝらほにくく  
さいふ様のものにして其語の大半は不明なり。其中對照比定すべき漢字の明に唐音を以て解説し得べき  
ものは左記の如し。

○りやんこ 兩個 ○ちやうこ 這箇

○べく 駝牛 (華夷通考卷三に暹羅物産として記されたる駝牛(ベグウ)遊  
の本場にして或は可うるしと稱せらるるものべくなり)

また葡、蘭、唐三國音跡を混用し、或は純粹に西洋語的なるもの、或に南洋諸島の地名と看做すべきものは  
左記の如きものあり。

○こんはんや 公班術、公班牙術 (Companhia)

○ちよろくちよろけん 著羅相印度 (Candy)

○さるぞ (蘭 Sarsje)

○じやからく (Jucara?)

○すもろこ (Suamara?)

尙この所謂唐人の木造りの文句につきては、秘藉以貫の難波土産に一説あり。唐音起源の解説にはあら  
ざれども、唐音まがひの文句の解説なれば、こゝに併せ記すこと左の如し。

又譯名は……今こゝに……の……に……の……大……

その文句に、

らうがさきろくほにやふたうにやくこんもつきん

さいふ事あり。是はむかしの東國歌に、

うらが齋坊にや豆腐こんにやくきんもつだ

さいふをかなを上下に置かへて用ひたる也。此類にて埒もなき事を知るべし。(薩波土産國姓爺合戦

の文句評注の中、きこらいくびんくはんたさつぶおんくの條)

近松子が屢唐音の言葉を用ひしこと、上記の如くにして、眞の唐音語もあり、又似是而非なる唐音まがひの語もあるのみならず、上記の如く西洋語並に佛語等をも、自由自在に利用したるは流石に近松の才筆と稱すべし。軍に埒もなき事と貶稱し去るは、いさゝか酷評さいふべきか。

次に又近松子の作たる本朝三國志の中之卷大王道行の段にも、唐音まがひの文句を用ひたり。例へば左の如し。

二子名を以て

……野飼の牛を引きつれて、機歌牧笛かすかなる、杖つくぐと聲きけば、

風阮來用阮來 君音信不來 花開愁不開 江瀨東洋海

此文句の振假名を見れば、眞の唐音語らしきものもあり。又朝鮮音に擬したる音らしきものもあり、其發音不精確の點なきに非ずと雖も、大體唐音まがひの頓作と看做すべきものなり。總積以貫の如く、一概に皆やくたいもなき事なりとせるべし。さいふは又いさゝか貶刺の評さいふべし。

享保時代の戯曲演劇の文句に唐音語を用ふるは、近松子のみならず、竹田出雲、江島其碩の二子も、亦唐音語を用ひたり。

國姓爺明朝太平記は、江島其碩の享保二年の作なり。その第一旅人の仕合吹付た浦の店船の段にいはいく、

旗幟皇女……風次第に大日本肥前の國松浦那平戸さいふ浦に吹きつけられさせ給ひ……爰はさて何

さいふ所ぞと御尋ありけれ共、唐音にして日本人に言語通ぜざれば、……いたはしや旗幟皇女御泪なが

ら、たいみんちんしんによろ、君けんくるめいた、かりんかんきう、さいもうすがすんへいするともこんた  
 かりんごな、あはしてけんさんはいろ、さらやあくご、仰あつて、さめんご、啼き玉ひければ、元より長兵  
 衛長崎ものなれば、唐人口合點にて、……きんにやうくご、唐音で返答をみしらすれば、……元來和蘭内  
 常く父が國の唐音き、おほへたる身なれば……。

此の其碩の作は、近松子の國姓爺合戦（五）によつてつくりしもの、如くなれば、その所謂唐音語も大體近松の  
 原作に準ずるものなりと知るべし。

### 十一 竹田出雲と唐音

次に諸葛孔明鼎軍談は、竹田出雲享保九年の作なり。總稱以頁の難波土産（五）の國姓爺合戦の文句評注の中  
 にも、「近年鼎軍談の唐音は、まごこのたういんなりといへるが如く、や、眞に近きものなり。例へば、

先歸さいふごを此國では、刑棘林、刑城を標、千大夫を松位、天神を梅位、……ひきふねは、援船、船は、三板や  
 り手を賣、謀くつわを亡、八、揚家を冤、家だいじんを大臣、かりを借、もらふを買、……よほんほくくゑよ  
 ほんほくくゑよ、きゆる思ひはなごかはさげぬ君のよほんほくくゑよ、よほんほくくゑよ、わい。

是が日本のはやり歌、療言の標で、おみ、に入まい。是をこ、でうたふ時は、  
 不、馴雪而堆、相思善乎くく号。善乎善乎号。相思何爲、不解君之善乎くく号。善乎くく号。好  
 々ごこそうたひけれ。

以上漢字に振假名をつけたるものは、即ち作者竹田出雲が唐音と看做したるものなるが、比較的唐音に近  
 似すといふのみ。其不精確なるは、則ち他の諸作の所謂唐音まがひの語も大抵同様なりといひて不可な

るべし。

之を要するに、近松、江島、竹田三子の作中に、斯の如く所謂唐音の文句あるは畢竟唐音流行の時代の風潮に投合したるものにして、諸子頓作の才筆を評すべきものなり。

歌曲演劇に於ける唐音につきて聯想するものは、左記の如き市川團十郎唐音稱呼の事なり。歌舞伎年代記卷二享保十五年の條にいはく、

○ある僧の云、日本の市川團十郎（みづのぶじゅうら）といふ力者ありや。中華にて商舶來往に眞實を傳來りて見侍り、長崎よりの文通なり。是は矢の根五郎なるべし。父の名繼て、他の國まで且ひゞかする事、未曾有の譽、無比類孝子なるかな。

これ即ち二代目市川團十郎の矢の根五郎の給が支那に傳はりし爲か支那より渡來せる僧が、日本にスクツエンドパンシランといふ力者ありやと聞ひしことを記したるなり。振假名の唐音や、不精確の點もあれども、斯の如き唐音稱呼が世に傳はりしは、畢竟團十郎の高名ささもに唐音流行の世なりしことを示すものなりとすべし。

## 十二 頼山陽と唐音

文化文政時代は江戸文物の熾熱時期なり。化政二十六年間、唐音の流行愈々盛なるの狀あり。島津重豪著の南山俗語考は文化九年に刊行され、太田方の演吳音圖には同十二年の自序あり、文政三、四、五年頃には唐音の唐人韻の流行あり。イツカウ、リヤン、サン、スウ等の唐音呼び聲の争の遊びは文化文政年代盛に流行せり。其他化政年代に於ける唐音流行の事を徵すべき史實頗る多し。

さて當時の大文豪たる顧山陽の唐音觀如何といふにその谷小野泉藏論詩律書及びその別紙「山陽遺稿 卷一、文」に於て

爾詩自西遊。與足下。論近體聲律。因語在長崎所見聞。以謂華音不足學。(中略)而強說之者。吾人聽人之具耳。

(上略)而歌以華音。聞以邦耳。是亦安居鐘鼓。何感情之有。

といふを以て考ふれば、華音を崇好せざりしが如し。然れども、その友人武元景文の爲に「登々行莽泥(山陽遺稿卷五、文)を作り、その中に

翁前武元景文善詩及書。嗜古香蹟。自號曰登々庵。登々盃打碑聲也。

といふを見れば、少くとも唐音の知識絶無にはあらざりしことを察すべし。

登々といふ庵號の二字の唐音は「Teng-teng」または「Tang-tang」にして、石碑文の「古香蹟」なきを摹印する石碑の碑を打つ時の「トン／＼」の聲に似たるを以て、山陽は右の如くいへるなり。

尙、山陽は文政元年西遊して、肥前に入り、長崎に留り、南して薩隅二州に至りしが、その「長崎雜詩」の中に、

藥街浮水碧。莎館露峯青。山約人烟密。市籠潮氣腥。兒童語漢簡。舟楫雜吳聲。誰信爲塵境。孤吟

倒酒嬌。(山陽詩鈔、卷之二、西遊稿上)

と詠じたる一首あり。「兒童語漢簡」の漢語は即ち唐音の支那語なり。長崎人は兒童も猶唐音を聞き覚えて、

日常の談話にも、之を交へ用ひしこと、山陽には珍しく感じたるならん。又「長崎路十解」の中に、

金釵芳柔壓海腮。百杯泉釀濁眞珠。容誇掛職成高手。昨夜三嵐吳下奴(同上)

と詠するを見れば、拳の遊戯に於て、



一 (一) (二) (三) (四) …… (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (一百)

こいふ唐音を以て参をうちたる掛辭又は呼聲の奇妙なるにも耳を傾けたりしなるべし。而してつひに薩摩に入りて詠じたる石壁子行の石壁子は島津の唐音なることを知りしものなるべく、又その「薩摩詞」八首の中に、

相逢兩客市郎間。言語牙々雜漢蠻。御最京菴蹟價值。白稱兩度入燕山。

詠じたるを見れば山陽が琉球人の唐音唐語せるものにも注意せしこを見るべし。之を要するに、山陽も亦少くとも唐音につきて相應に注意せるものこいふべし。

### 十三 皆川淇園と唐音

次に文化四年に歿したる皆川淇園の唐音につきても記すべきことあり。彼はその「淇園文訣」上の巻に記して曰く、

唐音ヲ學ベバ文章ヲ作ルタメニナルト云フコト、近來ヨク人ノ多ク言フコトナリ。唐音ニテ素讀スルコトガ爲ニナルト云フナラバ、四書六經等ノ文字直讀ニテ記憶シヤスキ爲ニイフカ。……ソレモ素讀シタルマデニテ、其直讀ノ内ニ發理ガ聞ヘネバ、……格別ノ益見ヌコトニテ、俗讀モ同シコトナルベシ。俗語ガ役ニ立ツトイハバ、吾イハユル小説ノ助ト同ジ説ナルベシ。イブレトモニ本邦ノ人ニハ無用ナル骨折ナルベシ。

こいへるを見れば、唐音を喜ばざりしもの、如し。されども右の如くいふこと、もに同書同巻に文章ヲ書ナラハントスル者ハ、古書ヲ廣ク讀ムベキコト勿論ノ下ナリ。俗語小説ノ書ヲ衆ヲ讀ムベシ。

といへる俗語小説は唐音の流行とその研究に作つて發達したる支那文學なれば洪園も決して唐音を無視もしくは輕蔑したるにはあらざるべし。況んやその磨光韻鏡餘論序洪園文集卷之三にもありの中に左記の如くいへるを見れば洪園も唐音を學び唐音を參考せしこと明なるに於てをや。

蓋余自少學易。及年近三十。悟易有開物之道。而其道要自文字聲音乃可得而入也。於是更復稽核文字聲音於其四聲四等開合清濁。悉皆窮之源委。乃取本於唐音。而遠溯於姬周。

「乃取本於唐音」といひし洪園が唐音につきて知識ありしこと明白なり。されば前文に於て唐音を以て本邦人には無用ナル骨折ナルベシといひしは蓋し餘りに多く唐音を崇尙せる者に對していひし者なるべし。記者の所載に「韻鏡皆川先生傳一名韻鏡反切鈔皆川先生傳」名くる一書あり。天保三年の寫本にして一冊本なり。東條孝泰閣の「日本教諸家人物誌卷上の皆川洪園の條には、多く其著述を列舉し、殆んそのすべてを記したるが如き中にも、此書名見えざれば、今直に洪園の著述もしくは其口授の説なりと武斷し難けれども、洪園は音韻の學にも精しかりしこと、上記の磨光韻鏡餘論の序文を見ても之を想見し得ることにして、松浦清靜山と號す、平戸藩主なりの皆川弘道先生著表（「横瀬貞輯、島田重禮先生序、近世名家碑文集」明治二十年發行）の文を見れば尙明に之を知り得ることなれば、「皆川先生」と稱せらるゝ學者にして、韻鏡學の著述ありせば、皆川洪園なるべしと推定して不可なきが如し。果して然りせば、右の寫本の韻鏡の一書に唐音を參考して立説したるもの少からざるは、洪園としては偶然の事にあらずと思はるゝなり。

#### 十四 「新シキ音」の傳來

又文化文政年代の事なるが、島海恭仲默松亭と號すの「音韻啓蒙」（文化十二年龜田鵬齋序）に記せる左記の

説は、簡單なる言なれども、唐音傳播の影響に關して注意すべき説をなしたるものなれば、今こゝに記さん。

新シキ音ノ傳來

若シ他國ヨリ其國ニ云ハサル音ヲ傳ヘ、久シク其音語其國ノ詞ニナル時ハ、遂ニ其國ノ人モ其音ノカハルコト人倫ニサヘアレバ皆同ジク云ヒ出スコト也。近クハ吾邦ノ古ヘバビブベボノ音ヲ用フルコト無ク、又合音ニモヒユン ウイー等ノ音ナドハ無キコトナルニ、近世支那ノ清朝音ヲ傳テヨリハ離タレモ皆云フコト也。是レヲ古來ヨリ此邦ニアリシト云ヘカラズ。

この説は、「近世支那ノ清朝音」即ち唐音の我國に傳はりし爲に、近世日本に於ても、ヒユン ウイーなごの音が多く世人に呼ばるゝに至りしことを言へるものこそば則ち可なり。然れども、古代日本には斯の如き類の拗音ありしといふべからずと説くに至りては、いさゝか精考せざる説にして、古代日本の漢字音讀に拗音のありし事は隠れなきことにして、拙著漢字音の研究（史學雜誌第三十五編掲載の中、第三號二一八ページ以下）に於ても、其事の一端をのべしが、更に二三の古代拗音の事を増補せんか。

親鸞聖人の「尊號眞像銘文」（木末二卷末の卷の末に、正嘉二歲戊午六月廿八日書之、愚癡親鸞八十六歲といふ跋文あるもの。昭和四年高田派本山専修寺智寛印刷發行）には、

- 五逆    コクキヤク                      歸命    クキミヤウ
- 歸入    クキニフ                            惡鬼    アククキ
- 智榮    チキヤウ                            汶水縣    ホチシキクエン
- 法華    ホウクエ                            逆勃    クキヤクハウ
- 蓮信    ケキヤクシン                      華嚴    クエコン

と自筆の振假名あり。此拗音の振假名について聯想するものは淺野長祚の「寒聲環讀卷一」の説なり。同卷第三條に杜鵑の鳴き聲より杜鵑の別名たる不如歸の唐音に言及し、更に進んで言ふ、

不如歸ノ唐音ノコトニツキテ思イ出セシハ幾年親鸞上人ノ作リシ正信偈トイフモノ、舊抄本ヲ見タリシコトアリシガ、ソノ中ニ歸命無量トイフ歸ノ字ニ、クキト假名ツケテアリシ。フルクハクキノ音ナリケルヲ、クキ切キトナルヨリキノ音ニ讀ケルモノニヤ。

次に釋素眞著の「梵學須知漢音正辨明和正辰〇九年素眞自序」には、

昔ノ雅俗ハ國字ヲ以テ漢字ヲ音スルニ拗音ヲ以テスルヲ雅トシ直音ヲ以テスルヲ俗トス。假令バ源氏平家ハ雅ナリ源氏平家ハ俗ナリ。

と記し、次に紀州の學者藤井常枝の「和漢字名錄」(安永四年著者凡例、天明六年龍公美序、刊行の年未詳)卷之下、乾の「○字音假名遣之解」の章に、也、愈、與、陽、用、永、樂、魁、役、欲等は、それ〴〵元來イヤ、イユ、イヨ、イヤウ、イヨウ、イヤク、イヤク、イヤク、イヨクの拗音なりしが、つひにヤ、ユ、ヨ、ヤウ、ユウ、エイ、ヤク、ヤク、ヤク、ヨクの直音となりしことを叙述し、同卷の「○字音轉聲之解」の章には、權輿をケンニヨミよむは、輿の字にもイヨの拗音ありしによることをのべ、また「○以拗音爲漢直音爲吳之類」の一章を記し、同卷坤の都の「再拗音例」の章には、常倫の切は純章倫の切は諄なることをのべて、倫にリュンの拗音ありしことをのべたり。

其他倫の字は力述切または韻審切なれば、リュン(拗音)なるをリン(直音)とし、律は呂成切成音ジユツなれば、リュツ(拗音)なるをリツ(直音)とし、牟は以出切なれば、イユツ(拗音)なるをイツ(直音)としたる點につきて注意せらることは、既に上記拙著漢字音の研究の中にも引用せる前田綱紀「松盤空の「桑華字苑」の外音訓略述等」にもありて、文化年代以前にも、既に種々の拗音につきて注意もし熟知せるもの少からざれば、ヒュン、ウイー等の音

を以て全く「新シキ音」ヲ看做すことは訂正すべきものなるべし。但しヒュン　ウイーの如き合音の近世本邦人に多く呼ばるゝに至りしことを注意せる點は、取るべきものなり。

この點については、大槻玄幹も、その著「西音發微」〔文政九年刊〕一名和音唐音對註西音發微に於て、これに言及せり。之を鈔録すれば、左の如し。

和蘭ノ字音ヲ對譯スルニ、直音ハ和音可ナレドモ、拗音ハ唐音ニ求メザルベカラズ。因テ直拗共ニ唐音ヲ用フル也。

即ち玄幹も和蘭の字音を對譯するに當り唐音を利用したるのみならず、清文鑑及び清文啓蒙の二書をも參考して、清文即ち滿洲文の漢字音譯の法なきを參接したるは、亦唐音に餘なきことにはあらざるなり。

## 十五 唐音琴譜

文化、文政年代及び其後の最近世史上の唐音にあらはれたる近世日本への支那文化の影響の著しきもの、少くとも二三あり、本章以下に於て之を叙述せん。

第一は唐音琴樂の事なり。江戸幕府時代の初期に隱元禪師よりや、後に來船歸化したる明僧心越和尚を以てその開祖とせる水戸の諱昌山祇園寺派の、心越和尚清規によれば、唐音を以て節經せしこと明なるが、心越はまた琴樂に精通し、近世日本の琴樂再興の名譽を享有すべきものにして、琴譜の歌は、唐音または明音にてうたひ、其流を汲める者は明治以後に至りても、猶唐音の樂譜と歌詞を吟詠し、且つ純支那的の明清樂器を用ひたり。

心越和尚唐音琴樂の事を知らんさせば、左記の諸史料によるべし。

東阜全英(東阜は心越の號)○東阜琴譜○五知齋琴譜○有德院殿御實記卷十七四十二○假名書院○項通又綴卷上○靜觀處集卷下○東御遺稿○香々難談卷下○香々遺文の中の一絃通志と七絃の傳本の條○記者所藏の東阜琴譜諸寫本

今上記諸史料によりて、心越東阜和尙の琴樂傳受の略系を作製すれば左の如し。



右の表中の主なるものについて叙述せん。

人見竹洞はその竹洞文集を關するに、その東阜師と初見の年月は不詳なれども、天和の初なるべし。數年間周旋交際されし見ゆ、明和贈答の詩文尺牘數十篇を載す。國字を以て琴樂の指法の解を記せしもあり。語首不遇音調もこより異なり、指法も瞭解し難く、初め學びし時の困難は想像すべし。竹洞の熱心と滑

11 15 50

心さによりて唐音琴法の近世日本に傳はりしこと、斯道の爲め大にその功を稱すべきなり。

次に杉浦琴川は寶永二年の林祭酒信篁鳳岡等の序文をのせて

東阜琴譜五卷

大明 心越禪師 訂音

日本 杉浦正職 重校

を撰したるも、消奪草本のまゝにて、その書世に傳ふる事なしと云ふ。其門下小野田東川最も其技に熟達し、その龜奥を究むといふ。有徳院殿御實記附錄七には、

音樂も久しく絶え御法會ならでは、俗人樂樂することなかりしが、元文三年九月十八日、本城にて舞樂御覽ありて、群臣見ること許されしかば、古ぶりの樂をめぐらかに見聞して、心ある者は大に感ぜしなり。琴は今の世に彈する者もたえて無かりしに、寛文の頃、明の俗心越さいへるが、此國に投化せしき傳へ來りしを勅定奉行杉浦内藏允正昭が家人、小野田加兵衛東川といへるものひまりぞ學びたりける。かくてその事世に傳はり、又京都方面にも傳はりし事の如きは、本論文の主意外の事なれば深く之に言及せず。たゞ小野田東川等によりて後世に傳はりたる唐音の琴曲のみについて叙述せん。

東川の事は、東阜琴譜にも、左の如く記されたり。琴譜の寛政九年に刊刻されたるもの、菊池選甫の序文に曰く、

及師○心越師之門者。東川野廷賢最嗣。琴譜原五十餘曲。東川爲選十六曲以授學者。今之琴家。皆其餘

裔云。

東川が心越師より口授を傳受せりといふは誤なり。東川は貞享元年に生れ、心越師の元祿五年水戸に在りし時は僅かに九歳なり。元祿八年同師の水戸にて遷化の時は僅に十二歳なり。頭敏なりといふも、九歳

や十二歳にては離解の琴樂を學び得る道理なし。右の文に師の門に及ぶもの。云々。とあるは、東川を以て越師直接の門人といふに解せらるゝ恐れあり。故に一言之を辨するなり。

さて十六曲は、上記の琴譜によれば、左記の如し。

調絃入弄 秋風辭 梅花(二口瑠芳引) 消浪歌 子夜吳歌 幽桐泉 歸去來辭 安掛曲 寄隱者

南窓樓 長相思 相思曲 離別難 倚闌操 露凝引 陽關三疊

この十六曲は、楚の屈原、前漢の武帝を始めとして、李白、杜甫、蘇軾等の如き唐宋の名家に至るまでの作を作曲したるものにして、典雅優美、士君子の傳唱して可なるものなり。而して此十六曲の唐音を以て唱歌奏樂されしことは、東皐琴譜の後世に遺りし諸本ミ之を學びし者の附けたるものらしき唐音の振假名を見て之を推知することを得べし。而して是等の諸本に記入されたる唐音が同一の曲にありても、大同の中に小異あるを免れざるは、授受筆記の間、即ち口授筆授の間に自ら生じ易き誤開誤記なきによるものなるべし。

次に浦上玉堂父子三人の事は、「山陽遺稿卷三」文に「玉堂琴士傳」の文章あるによりて、周知の事なれり。

心越及び小野田東川の後、東川に就きて學びたる京都の伶人、辻近任、並に東川と往來して琴學再興の事に従事して、琴學大意抄(享保七年壬寅四月二十八日物部茂卿の跋文あり)を著述したる物、徂徠の如きは、心越禪師の唐音琴樂につきて深く興味を有せし者にして、徂徠は特に琴門學者としての唐音崇尙及び音律研究の爲に琴譜を愛好せり。唐音ミ琴樂乃至は音律ミの關係につきて徂徠の注意したる觀察は、「徂徠集」卷十六の「附善通繼語人の文によりて之を窺ひ知ることを得べし。今其要點を略述すれば、左の如し。

朝鮮使節の江戸に入りし時、一長崎人あり。江戸の人ミ、もに使節の行列を観る。既にしてその行列鼓吹の樂の中に、二絃琴を奏するをきくや、長崎人は低聲之に和し、音韻曲節朝鮮人の奏樂に随つて相上下し、節



々曲々皆合し相訥ひ、傍人驚異せざるはなし。乃ち之を質問したるに、在崎中唐音樂譜を支那人に受け、其文字  
を樂理の精しきことは知らざるも、聴き覺えたる樂譜によりて、鮮人の奏樂に和することを得たるなりとあり。  
徂徠は此事によりて、彼の所謂華音即ち唐音と樂譜との間に微妙なる關係あることを感悟したり。徂徠  
の博學多才なるは、琴曲樂譜にも及び、上記の如く琴學大意抄の著述ありしも、畢竟斯の如き感悟ありしに由  
るこそならんと思はるゝなり。言ひかふれば即ち琴曲が唐音にて唱奏せらるゝこそがやがて彼の琴樂に  
興味を有することとなりたる一原因ならんと思はるゝなり。

心越禪師の傳へたる唐音琴樂に比して卑俗なる小曲も、江戸時代の初世に傳はりたり。即ち増補松の落葉  
〔元祿十七年○改元寶永元年大木扇徳編〕新群書類從歌曲六に之を收むるの卷四に載せたる「唐人船」の歌の文句  
の一語殆んき全く解し難きものも、唐音小曲によりて之を瞭解し得ること左記の如きものあり。

唐人船の歌の文句

いきにてくすいちやゑんちやすいちやすいふい

唐音小曲一更

一更裡天。一更裡天。月照紗窓。人也未眠。被覆兒。寒凍得渾身上睡。(下略)

〔岡島冠山唐話纂要卷五小曲〕

右の兩者の對照

いきにてくすいちやゑんちやすいちやすいふい  
一更裡天 一更裡天 紗窓 月照 紗窓

この唐音假名は唐話纂要の外、唐音和解正徳六年○改元享徳元年道遠軒自序の坤の巻にも、醉胡蝶ツイウデ

題して右の小曲と同様のものを載録せるも、その唐音振假名は唐語纂要に及ばず、少くもいきにてく」の解説には唐語纂要によること便利なり。又天明五年刊の唐來珍和著の和唐所解にも、一人物の「一更裡天」云々。をうたひしこを記し、その唐音假名は唐語纂要の唐音と同様なり。なほ又曲樂小令（寫本一冊、記者所藏。支那小曲十二篇として譯師清河又彦所傳の曲樂四篇をのせたり。安政七年○改元萬延元年の寫本なり。）にも同様の小曲をのせたり。但し題目及び文句の唐音少しく異なれり。

關五更

一更裏天イモリランテン（再）月照紗窓ユキアカツウヅマエ（下略）

此外唐語纂要所載の小曲は、概ね上記の一更裡天の類に屬し、唐音和解所載の笛譜は雅俗相半するものなり。

次に寶曆十三年刊の大枝流芳の雅遊漫錄（雅遊漫錄）は、南京橫笛の笛譜として相思曲（シヤンスウキヨ）清平樂（チンビシヨ）等の唐音の樂譜を記載せり。又當時明樂流行して、唐音を以て古詩唐詩等をうたひて樂をなすものありしことは、同十四年刊の蟠桃含綠柳著の萬藝開合袋に、左の如き記事あるによつて之を知ることを得べし。

一明樂是は近來時行地下にても弄人多し。ゆへにこれも十が一記して知らしむ。華韻にて詩をうたふて樂をなす。詩は詩經の大雅小雅爾雅、或は杜子美、或は李太白などの樂府賦の詩あり。譬ば

清平調 觀塞

當世詞 近頃は若人の出會に唐の音樂略しの中にもいひもてあつかひ候。

斯の如き事實は、即ち唐音琴樂の流行を併行共調して起りたるものとして注意すべきこといふべし。次に明和、安永年代に至り、又劍派の唐音樂書世に出でたり。是れ即ちさきに寛永年中に明末の亂を避け、

樂器を抱きて遂に長時に來船歸化して、明樂を傳へたる魏燮侯以來の唐音の明樂なり。燮侯四世の孫を魏皓といひ、字は子明、號は君山といふ。其祖先鉅鹿郡に住みしを以て、鉅鹿氏となる。幼より家傳の明樂に通じ、其技を究盡す。其傳の傳からざるを慨み、一旦奮然として京都に來り、之を同好の人に授く。人や、明樂の妙を知り、一時名聲漸く揚がる。京都に居ること十餘年。從學するもの前後百餘人。宮筠圃、筒井景周等はその入室の弟子なり。その名諸王公卿に達し、近衛相公、東本願寺法主の招に應じて明樂を奏し、益々名聲をひろむ。その東本願寺の机設別殿に於て、船を苑池に浮べて奏樂するや、冷泉大納言爲村卿亦坐にあり。和歌を作つて之を賞美していふ。

唐歌をうたふ唐聲唐ころも

唐人ならで唐めける船

と。唐聲にてうたひたる唐歌は、即ち唐音の明樂なり。而して子明在世中に刊刻したるものは、

魏氏樂譜 魏子明輯 明和五年刊

にして、子明歿後、子明は安永三年に歿すに刊刻せられたるものは、

魏氏樂器圖 筒井景周編 安永九年序跋

なり。これ等二書の外、寶曆九年魏氏序の樂器圖の零本一小冊子あり。何年の刊刻なるや不明なるを惜む。筒井景周編の魏氏樂器圖の附録に、編者の君山先生傳あり、これによれば、魏氏家傳の明樂はすべて二百餘の詞曲ありしが、魏氏樂譜に載せられたるものは五十曲なり。而して是等の詞曲がすべて唐音にて吟唱されしことは、五十曲にすべて唐音の假名をつけて刊行せられたることを見ても之を知り得べく、又上記の冷泉爲村のうたふ唐聲の和歌によつても之を知り得べきなり。

次に心越禪師傳授の唐音明樂は、其高弟小野田東川の後之につぐものなく、其遺甚甚だ振はざりしが、寛政時代に至り、肥後の草場温卿、下野の菊池遷甫、ともに之を好み、寛政九年二氏同校によりて、東阜琴譜を刊刻せり。刊本には詞の本文のみにして、唐音の振假名なれども、實際唐音にて唱誦吟咏せしものと見え、記者所藏の二部ともに朱書もしくは墨書にて唐音を附けたり。例へば左の如し。

子夜吳歌

長安一片月。萬戶掩衣聲。秋風吹不盡。總是玉關情。何日本胡塵。良人罷遠征。

歸去來辭

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。守時(口一段)

其他總計二十一曲、前音、角音、羽音及び越音に類別せり。唐音唱歌の聲今猶遺つて耳に在るが如き感なくんばあらざるなり。

大正八年の夏購求入手したる、東阜琴譜は、古賀桐庵の手澤本にして、世良太一氏が桐庵の長子謹堂又茶溪と號すより賜はりたるものなる山の奥書あり。以て桐庵の琴道も、もに唐樂唐音を解せしことを推知すべく、又同書に附録三枚の寫書を見れば、光孝天皇御製の春野一首、きみがため春の野にいで、若菜つむ我が衣手に雪はふりつと、竝に山邊赤人の富士の歌、外二首の和歌に心越の琴譜を應用せる樂譜を記せるあり。何人の手寫なるか不明なれども、兎に角心越の唐音琴譜の流布の一例として見るべきものといふべし。

ついで文化年代の熊本の村井琴山が、又別に清人の月琴譜を學びて、唐音の南蕩浪浪二曲等を彈唱して樂みし事は、「最近世叢話」に見えたり。

唐音琴樂の傳播は心越魏變後の僧俗二家によるのみならず、長崎來船の幾多の清國人は其趣味として好

める月琴横笛の唐音明清樂を唱奏吟詠して、自然に唐音々樂の妙味を長崎人に傳へ、長崎人もまた自然に唐音々樂の妙味を解するに至りしことは、前記の「徂徠集」文中の一崎人の例を見ても、之を知り得ることなるが、右の村井琴山の月琴傳授の如きも、斯の如き時代に起れる一實例と見るべきなり。

又長崎府音通事の唐音々樂の事も、之を想見するに難からざることなるが、古賀設堂が長崎に至り、譯士游龍氏を過訪し、「薛稷名饌異邦厨」の美味にも、「月琴蛇絃聲瑟」たる唐音々樂を聴きて、醉ひ且つ樂みしことは、「設堂遺稿抄」卷六の七言古「番西歸途中事寄東武諸友」の詩によつて之を知ることを得べし。尙又約十年前「曲樂少令」を題する一寫本を得たるが、

關五更(ナヘウウ、ケン) 銀紐線(インニヘウスウ)

劈破玉(ビボラヨ) 一愛(イアイ)

楚江引(ズチキヤンイン) 陽關曲(ヤンクワンキヨ)

梁父吟(リヤンフ、ニイン) 新水令

梅花三弄(メイハアサンロワン) 清江引(チンキヤンイン)

歌乃 黃梅時節(ワンムイズウツエ)

念口令(キケヘウリン) 月夜間齋

良夜聽琴 七夕雙星

等の調曲概ね唐音の假名を附けたるものを寫し、且つ好「一朵茉莉花」(ハアヘウ イトラノリイ ハア、等四曲の新曲を寫し、「右四曲譯師清河又彦所傳也」を記せるを見れば、唐音譯士中、特に音樂を好める者は、其好む所を人に傳授せしことを察すべし。而して此寫本は安政七年○改元萬の原寫なるが、當時幕末國事

多難の時に於ても唐音明清の樂をもてあそぶ者多かりしことを知るべし。

此外清人傳士然の傳へたる「月琴音譜」(竹田の白書題語あり)「江芸閣の傳へたる月琴の樂譜」(月琴樂譜序跋参照)及び長崎の唐通事、竝に來船清國人より傳授せられたる納木派の月琴の樂譜「清風雅唱」(参照)なき諸流諸派の明清音樂は、皆唐通事もしくは唐音本土より來船の清國人より之を傳授したるものにして、唐通事自ら明清音樂の師となりて、之を弘通したるものもあり(清樂曲牌雅譜参照)。而して是等の明清音樂は、皆唐音を以て唱歌吟詠せられたるものなり。

今次に江戸幕末嘉永年代以後明治二十八九年頃に至るまでの上記の如き唐音樂書の刊本及び寫本等を年表的に記して、以て幕末及び明治時代にも、唐音明清音樂の流行せしことを證する一助となさん。

(一) 五知齋琴譜 嘉永元年寫本一册

唐音琴樂史の研究に缺くべからざる良書なり。

(二) 琴譜 兒島國林校、貫名海屋序 同四年寫本三册

(三) 西齋樂意錄 百花園主人輯 同六年寫本一册

(四) 清新樂詞 同人輯 同七年寫本一册

(三)(四)の二書版下の如き清書本なり。

(五) 月琴詞譜 大島秋琴輯、岡田圭峯校 萬延元年刊二册

額山陽の題字、齋藤拙堂の題詞、沈萍香、江芸閣二清國人の題詞なきあり。

(六) 曲樂少令 安政七年○改元萬延元年寫本一册

(七) 東皋琴譜 榊原友仁寫 文久二年寫本一册、著者は梅溪と號す。「以竹逸琴士訂本書寫之三本之内也。

云々。さいふ跋文あり。

(八) 月琴樂譜 平井均卿同連山傳 明治十年刊四冊

上記清人江芸閣傳來の琴譜にして、天保年中平井均卿之を傳授し、之を其子連山、梅園兩女史に傳授して、益々之を世人にひろめ、明治十一年前後頗る盛に行はれたり。

(九) 清樂曲牌雅譜 河副作十郎編 同年刊一帙四冊

編者は長崎の人、杏村と號す。二百餘年來その家世々唐音通譯を奉職せるものなり。唐通事の唐音樂譜編述、吾人と相適合し、其題簽及び序文三篇は清國人の書及び作にして、支那趣味多きものなり。

(一〇) 花月餘興 平井れん(連山)編輯 同年刊一帙小本五冊

(一一) 月琴樂譜中井新六編 同年刊

(一二) 西奏樂意譜 山下松琴著述 同十二年刊二冊

著者は長崎の人なり。

(一三) 東卓琴譜 明治十一年寫本一冊

(一四) 大清樂譜 田中國毅編 同十四年刊一冊

(一五) 清風雅唱 富田寛著 同十六年刊一帙二冊

著者(溪蓮と號す)は楠木溪庵の門人にして、此書の第二輯の富田溪蓮の跋文によれば、

音時。吾溪庵先生得之崎陽譯官及清人。而授子弟。

とあり。第一輯には、溪庵を堂兄とせしむる市河米庵の序文をのせ、且つ唐音明清樂流行の狀況を記せり。

(一六) 清風雅唱第二集 富田寛著 同十七年刊一冊

(七) 清風雅譜 秋山鹿園著 同年刊一册

(六) 武藏百景之内岡田川水神森 小林清規畫 同年刊

書中明清樂の月琴が其主要の位置を占め、風景はたゞ其副たるが如き狀あり。月琴にそふるに唐管樂譜本を以てし、且つ支那風の茶器を畫き當時の支那趣味の流行を想見すべきものなり。

(五) 清風雅譜 故納木溪庵原著、駒井翰軒校 同二十一年刊一册

276 142

(四) 清風雅唱外編 同二十一年刊本の寫本か又は版下木一册

(三) 清樂曲譜 沖野竹亭著 同二十六年刊

(二) 明清樂之梁 百足登著 同二十七年刊初版再版

音樂全書第三編として、博文館より發行せらる。

(一) 琴曲獨標古 松本操貞序、大橋新太郎輯 同二十八年刊

日川百科全書第五編として、又博文館より發行せらる。其中に清樂及び胡琴の明清音樂の條あり。

(四) 新明館和樂獨習之梁 長原春田著 同二十九年刊

以上は刊刻及び抄寫の年の明なるものなり。

以下書寫の年の不明なるものを記さん。年は不明なれども大體嘉永以後の寫本たることは明なるものなり。

(三) 清唱唐音 (六) 清風柱礎

(五) 清風雅譜 (四) 胡琴譜

(二) 清風雅譜 (三) 尼姑思遠

(三) 魏氏樂譜

117 118 119 120 121 122 123 124 125 126

琴曲獨標古 松本操貞序 大橋新太郎輯 同二十八年刊

新明館和樂獨習之梁 長原春田著 同二十九年刊

武藏百景之内岡田川水神森 小林清規畫 同年刊

276 142



此書卷頭に魏鑾侯魏靖君山の略歴及び君山の弟子及び其流派の文化年代に至るまでの事を記し、簡  
單なれども有益の記事あり。

(三) 東皇樂譜、琴譜新聲抄合本 (三) 瑞南派清樂譜

(四) 唐音琴樂(二卷) (四) 琴聲附釋鈔

以上全部記者所蔵なり。三十五部の数を決して少しもなます。熨斗紛失その他散佚のものを集め盡し  
たらんには必ずや数十倍以上の多きに至らん。また寫本琴譜の折本の中には副曲樂譜を寫す爲に特製さ  
れたる紙を用ふるものさへあり。以て少くも明治二十八、九年即ち日清戦役の頃までは、我國に於ける唐  
音明清樂の流行の頗る盛なりしことを想見すべきなり。

## 十六 唐音の唐人踊

文化、文政年代の唐音流行の一現象は所謂唐人踊にあらはれたり。この踊は文政三年頃流行し、大阪下り  
「長崎踊おきり又はかんく踊」(看々阿踊、或は唐人おきりなき、稱せらるゝものにして、唐音を以てうた  
ひおきりたるものなり。馬琴の著作堂雜記抄松浦靜山の「甲子夜話」(變曉翁の「雲錦隨筆」其他諸書に見ゆ。頗  
る卑猥なる支那の俗謡によりてや、唐音を轉訛したる文句を以てうたひおきり、一時非常に流行したるが、  
文政五年つひに停止の嚴命を發せらる。「甲子夜話」卷九の「記事要領」を得たれば之を抄録すること左の如し。  
○世に流行することも、時々變遷するものなり。(中略)又去年比よりかんく踊と云つて、小兒の戲舞す  
るありて、都下に周遍す。其聲、唐音を傳へたりと云ふことなり。坊間版刻して賣弘む。今其圖並に歌  
謠を左に載す。

(同姓に歌詠の轉載は之を省略す)

然るに壬午○文政五年の春二月市長停止の事を國都に觸る。自是して止む。其文に曰く、

一唐人節之儀此度嚴敷停止被仰付候に付子供に至る迄かんく節り歌杯決て申間歸候。且辻商人節寶堂枚摺繪草子杯にも右唐人節竝にうた杯持流行候者有之ば其所留置町所聞糺し早々可訴出候事。右之通被仰渡候間町内限り可相觸候以上。

此停止嚴命を一讀して唐音にてうたひ節りたる唐人節が一時殆んど世上を風靡したるが如く流行せしことを知るべし。唐音流行の時代とはいひながら珍しき事といふべし。

## 十七 唐音の拳の遊び

文化文政年代唐音流行の勢の盛なること拳の遊びの掛け聲によりても之を知ることを得べし。唐音拳の著述の同年代に出でしものに左記の三部あり。

- (一) 拳會角力圖會 義服吾雀等編述 文化六年刊
- (二) 拳獨稽古 逸軒搖舟等著 文政十三年刊
- (三) 七拳圖式 自列亭一楚著 同年刊

此の拳の遊びも支那より傳はりしものにして長崎に於ける日支貿易の發達に伴ひて多く來舶したる支那人によりて先づ長崎に傳はり漸く京阪江戸その他諸方にもひろまりて流行し特に享保文化文政天保頃には最も盛に流行したり。而してその掛け聲または呼び聲は、「甲子夜話」卷三十七に

左右曰拳會は相撲場の如し。

又呼聲には、一、二、三、四、漢和の音を交へ、イ、リ、ヤ、ン、サン、スウ等漢音なれば、茶を伏せ、ヒトツ、フタツ、ミツツ、ヨツツ等和睦なれば、茶を開く。云々。

こあるが如く、和漢漢音即ち唐音を相交へて用ひしが、専門的好事家の間には、唐音にて行はれしが如し。而して一より十に至るまでの數字、及びその他の拳の遊びの権略的言葉の唐音は、大略左の如し。

- 一 イッパツ 二 ニッパツ 三 サン 四 スウ 五 ゴ 六 ロク 七 シチ 八 ハチ 九 ク 十 ジュウ
- 没打 メツク 對手 タイテ 打花 ウチハナ 拳 ケン

十のトウライは蓋し都來の唐音より來りしものなるべし。十は或はトイ三呼ぶことあり。是等の事はすべて上記(一)(二)(三)の三番によりて記したるものなり。尙中川極堂の「年中狂詩」著述刊刻の年さにも詳ならず、卷一の正月之部に、魚市と題して、

初市賣盡海鮮。

羅喉場祝開酒筵。

醉打拳不替七八。

寒南成又板賀連。

と詠じたる一首あり。寒南、板賀連の二語の意義は不明なるが、七八のチエイバマの唐音なることは明なり。此狂詩蓋し唐音拳戯流行時代の作なり。詩中辛卯といふ干支の記さるゝものあれば、或は天保二年の辛卯ならんか。

なほ一言すべきは、上記の(三)の七拳闘式は元來(三)に記したる文政十三年より五十三年前の安永八年に初刊されたるものなれども、當時は未だ拳の遊びの盛に流行せざりしが爲に、頗る簡單なるものなりしが、文化、文政年代拳戯の流行盛なるや、(一)(二)の如き著書既に世に行はるゝにもかゝらず、安永八年の初刊本が、また文政十三年に再刊せられたるものたることなり。(一)の「拳會角力闘會」は頗る詳密なるものにして、編述畫工、

校補纂集兼工叢讀狂歌に參與從事するもの六人に及べり。

頼山陽ミ唐音この事は既に第十二章に於てこれを述べしが、其中「長崎語十解」の中に「争戯得戦について吟味せし」ことも一言せり。

次に嘉永二年に歿したる葛飾北齋の北齋漫叢の第十一編に、各種の争を説きし中に、「ミらけん」「争、角力」及び「唐人争」の三種あり。而して唐人争は兩人相對し立ちて之を行ひ、右の一人は

イ、ンロウ ハンウ ホチウ ヘイトン

左の人は

チイン リウミエ ヌウ ラ、ウツア アカン

さいふ掛聲をなす記したり。諸語未だ詳ならざるものあり。ホチウは好かりウミエは六々かヌウはスウ(四)の誤ならんか。或は別語の唐音まがひのものなるやも測られず。兎に角唐音流行時代の唐音的掛聲として一顧すべきものさいふべし。

争の遊びは江戸幕末に至りても依然として流行したり。

(一) 争鬪稽古 弘化二年刊 完全なる争鬪稽古を簡略化して新刊したる小本なり。

(二) 争鬪稽古 嘉永二年刊

(三) 争會相撲 同年刊

(四) 争早指南 安政二年序

斯の如く争戯の音名を列舉するも、無論此遊戯そのもの、記述が其趣旨にあらずして、其掛聲又は呼び聲の唐音語なるを以ての故なり。而してその唐音掛聲も少しく變化して

- 二<sup>ニ</sup> りやんこう(兩個)
- 三<sup>三</sup> さんこう(三個)
- 四<sup>四</sup> すむゆ
- 六<sup>六</sup> りうさい
- 七<sup>七</sup> ちゑさい
- 八<sup>八</sup> はま

初めは此表に記せる片假名の發音なりしが次第に平假名の如き發音となれり。しかもつひに唐音の轉訛たることを失はざるなり。

なほ拳銃の唐音に關聯していふべきことは同じく一種の拳銃たるチャンケンといふ言葉も、兩發(リヤンケン)の唐音の少しく變化したるものなることなり。

## 十八 チャンコロ即中國人考

支那人を呼びて或はチャンコロといふものあり。其語源明ならずといふ。思ふに中國人 *Chung Kuo-jen* の轉訛なるべし。若し果して然らば支那人をチャンコロといふこと決して輕蔑の意なくかへつて敬稱ともいふべきものなり。或はいふ、チャンチャン(江戸市中を支那人風の服裝をなして鉦をチャン／＼叩きながら鉦を賣りゆく者ありしによりて)つひに支那人の異稱となれりといふ。『備考』の字は唐音チエン *Chien* なり。『』といふ支那人の別稱に、犬コロなきのコロをつけたるものか。また或は清國 *Ching* 國は鉦の略にして、無類の異名なり)の轉訛なりともいふ。此説はやゝ輕蔑の發あるやに似たり。清國 *Ching* 國の説は、法月報第十三卷第九號掲載、東方學叢氏の「本島人先づ自ら言語を改めよ」の説の一節によるものとす。斯の如く數説あれどもチャンコロ即中國人説を以て最も穩當なりとす。

### 結論一言 特に唐音傳播の功用につきて

近世支那より傳はりたる唐音支那語の傳播流行普及の研究は、無論以上を以て盡せりといふにあらざれども、少くも唐音の傳來傳播流行の範圍が頗る廣汎なりしこと、及び今もなほ活語として用ひられつゝあるもの、少からざることをのこす大體は之を略述せりと思ふ。今唐音傳播の功用を列舉せんか、

(一) 唐音支那語といふ外國語學それ自身の研究によつて外國語研究に資益せしこと。唐音の中の拗音は「新シキ音」までいはれ、音韻研究の資料となり、其影響は拗音の少からざる西洋語の學習の爲にも有功の豫想的基礎を作りたり。(上巻十四の一章参照)

- (二) 漢文の解釋及び研究に有功なりし事。
- (三) 音韻の解釋及び研究の資料となりて、音韻學の進歩に與りて有功なりし事。
- (四) 我國に於ける漢字音の標準論定の資料となりし事。
- (五) 我國語の解釋及び研究に有功なりし事。
- (六) 佛典梵語の解釋及び研究に有功なりし事。又それはやがて日本文學の内容を豊富ならしめたる事。
- (七) 支那文學詩文小説(戯曲)の解釋研究翻譯及び作製等に有功なりし事。又それはやがて歴史地理の研究に資益したる事。
- (八) 支那人の漢字を以て音譯したる外國語の解釋及び研究に有功となりて、語學科特に歴史地理の研究に資益したる事。
- (九) 日支の通商貿易に便宜を加へて有功なりし事。

(一) 日支兩國人外交の爲に有功なりし事。

(二) 本草學醫學藥物產學の爲に有功にして特に本草物産の名稱の辨證等に有功なりし事。

(三) 音律樂譜の解釋及び研究に有功なりし事。

(四) 黃巢宗弘通の爲に有功なりし事。

(五) 唐音によりて其當時の日支交通關係を知るに與りて有功なりし事。

(六) 唐音語は近世の我國語をより多く豊富ならしめたる事。元來、言語は社會生活の一反映、文化發展の一表現なり。若し國民の社會生活民族の文化發展が排外的鎖國的保守的となりて固定不動となれば、言語も亦固定不動的となりて殆んき何等の變化増加なかるべし。言語の變化増減特に増加するは、社會の進化變遷、民族活動の一大證據なり。而して今多數の唐音的外來語、年來研究する所によれば我國語中唐音語は九百許りあり、が近世の我國語に増加したることは、近世日本に葡西蘭等の西洋語的外來語の傳播したる事と相併びて、近世日本の進展活動を證明するものといふべし。

追加一條

十四 「新シキ音の傳來の一章に追加すべきことあり。此頃尙書三冊(春夏秋冬四冊の中一冊缺)を購入したり。『天師明經篇』、『伏原』、『宣條』、『二錄家』、『阿書記』等の印記あり。本邦醫學史上有益なる資料とすべきものなり。

『明和三仲春十七此許』、『安永二年二月八日此許』の識語もあり。而してその師傳を筆寫せりと信ぜらるゝ振假名の中に

- 一 揆トク 越清トク 黜陟トク 王炎トク 舟服トク 和鈞トク

なき勘符のものあり。また以て所謂新キ音ヲ注意せし文化以前、早くより勘符の本邦人に實用されしこ